小幡演習報告　　2014年6月19日(木)

文責在大貫友一(ともかず)

第7篇　第23章　第3節　相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産

◆　資本蓄積…①「資本の量的拡大」として現れる

②「資本構成の持続的な質的変動」、すなわち「資本の可変的構成部分を犠牲にしての不変的構成部分の不断の増加」の中で行われる

◆　○「独自的資本主義的生産様式」、「これに照応する労働の生産力の発展」、「それによって引き起こされる資本の有機的構成における変動」は、「蓄積の進行または社会的富の増大」と歩調を合わせる以上に急速に進む←集中と技術的変革

○労働に対する需要…①総資本の増大につれて累進的に低落

①'総資本の増大につれて絶えず減少する比率で増加

②総資本の大きさに比べて相対的に低落

○「蓄積と集中の増大」⇔「資本の構成の新たな変動」…相対的な、それゆえ過剰または余剰な労働者人口を絶えず生産

◆　○「可変的な資本部分の増大」、それゆえ「就業労働者数の増大」は、常に「激しい動揺および一時的な過剰人口の生産」と結びついている

○「労働者人口は、それ自身によって生み出される資本の蓄積につれて、それ自身の相対的過剰化の手段をますます大規模に生み出す」⇒資本主義的生産様式に固有な人口法則(抽象と特殊・歴史との対比)

◆　○過剰労働者人口…資本主義的蓄積の槓桿、資本主義的生産様式の実存条件→産業予備軍として「絶対的に資本に所属」、「自由に処分」され得る

○資本の突然の膨張力の増大→「大量の人間が、突然に、他の部面での生産規模に損害を与えることなく、決定的な部面に投げ込まれ得るのでなければならない」。そのための過剰人口。産業循環⇔過剰人口

◆　○「資本主義的生産の幼児期」

…①蓄積が「搾取可能な労働者人口の自然的諸制限にぶつか」る→暴力による突破

②「生産規模の突然かつ飛躍的な膨張」…労働者の増加が必須(但し、人口の絶対的増加に関わりなく)→「労働者人口の一部の、失業者または半失業者への不断の転化」による突破

○「経済学」でさえも、相対的な、過剰な人口の生産を、近代的産業の生存条件であ

ると理解(但し、弁護論的に)

◆ ○≪労働者数が不変または減少の場合≫
生産規模が大きくなればなるほど、不変資本の支出の増加を緩慢に済ますため、より少ない労働者から、より多くの労働を絞り出す
○①可変資本増大：「個々の労働者がより多くの労働を提供し、それゆえ、彼の労賃が増大する場合」
②可変資本一定：a. 同じ量の労働力でより多くの労働を流動　b. 不熟練、未成熟、女子、年少、労働者への置き換えでより多くの労働力を流動

◆ 労働者階級…就業部分(過度労働と資本への服従との強制)⇔予備軍隊列(強制的怠惰)
個々の資本家の致富手段

◆ 「労賃の一般的運動」…産業予備軍の膨張と収縮とに規定→資本の膨張と収縮とに規定される
⇔「経済学」：資本の運動は人口数の絶対的運動に依存する、と転倒させて考える…「すばらしい運動方法」(?)

◆ 借地農業経営者は、「経済学」の想定とは異なり、過剰労働者人口を創出した(?)

◆ ○「経済学」：賃銀の増加と労働者の絶対的増加との関係を見ているようで、実は、「資本のさまざまな投下部面への労働者人口の配分という現象」を見ているに過ぎない

◆ ○「相対的過剰人口」は、「労働の需要供給の法則」の「作用範囲」を、「資本の搾取欲および支配欲に絶対的に適合する限界内に押し込める」
○「資本主義的生産の機構は、資本の絶対的増大が、それに照応する一般的労働需要の増加をともなうことのないように配慮する」→弁護論としては「補償」
○「労働にたいする需要は資本の増大と同一ではないし、労働の供給は労働者階級の増大と同一ではない」。資本は、需要と供給との両面に同時に作用する→労働供給を労働者増大から独立させる
○資本の専制支配の完成→「就業者と失業者とのあいだの計画的協力」→資本と「経済学」者：「需要供給法則の侵害だ!」⇔植民地では強権的に

★論点など
・相対的過剰人口創出の論理について
・「すばらしい運動方法」(S. 667)の「すばらし」さの意味